

---

# 格闘少女かつみ マギカ

剣竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

格闘少女かつみ マギカ

### 【Nコード】

N5697W

### 【作者名】

剣竜

### 【あらすじ】

魔女と戦う少女。だが彼女は『魔法少女』では無い、ただの『少女』だった！？様々な知恵と戦略、多くの人の手を借りながら戦う少女。魔法の力を入れた友と共に…

## プロローグ(前書き)

『 』 電脳戦記まどか マギカ 救世のテイマー達 『 』 の番外編を書いています。が、なかなかうまくいきません…  
これさえうまくいけばあとは本編もスムーズに進むのですが…

## プロローグ

午前七時…

街は徐々に活動を始め、多くの人々が通学や出勤のために移動を開始する時間帯だ。

ごくあり触れた風景。

この首都から離れた都市である見滝原市でもその光景は変わらない。

はずだが…

「ギヤアアアアア…！！！」

その常識はすぐに覆されることになった。

閑静なる朝の住宅街に響き渡る悲鳴。

まるで空を割くかのような甲高い断末魔が辺りにこだまする。

この声の主は一体誰なのか…

その後も狂気の叫び声が辺りに響き渡る。

「た、助けてくれえ！」

「そんな、うわぁ！」

どうやら何かに襲われているようだ。

人を殴る鈍い音や地面に叩きつけられる乾いた音が連続して鳴り響く。

しかも、襲われているのは集団の男のようだ。

無限に続くかとも思われる連鎖。

何十人も男たちが叫び声をあげ、倒れていく。

だが、数分してその声は完全に聞こえなくなった。

全員やられてしまったのか…

いや、一人だけ残っていた。

「ば、馬鹿な。寝込みを50人の不良で襲ったのに…、数分で全滅…」

その場に立ち尽くす男。

どうやら、先ほどの惨劇はこの男の指示の元に『ある者』を襲ったことで起きたことらしい。

50人がかりでも敗北するほどの相手とはいったい誰なのか…

「またアンタかよ前田サン、いい加減しつこいつすねえ…」

前田と呼ばれるリーダー格の男、そしてそれと対峙する襲われた張

本人。

話している間、ずっと髪をいじりっており、余裕たっぷりと言った表情をしている。

返り血を浴びながらもその場に悠然と立つその姿。

だが、その風貌はとて50人の不良を倒した物とは思えなかった。  
た。  
そう。

なにしろ、襲われた張本人である『彼女』は『まだ中学生』だったのだから。  
だが、朱色の髪を風に靡かせ、敗者の上に立つ姿はどこか只者では無い雰囲気醸し出している。

「う、うるせえ！お前がいるとこっちとしてもいろいろとやり辛れーんだよ！」

「だからって50人も差し向けることあないんじゃないすかね…？」

実はこれまでも彼女は前田に何回か襲撃されたことがあった。

ジャックナイフ使いの男や暴走族の男など明らかにヤバそうな雰囲気の者たちもいた。

だがそれらもことごとく撃破されてきたのだ。

「さてと…次はアンタの番だぜ、前田サン？」

「ひい！」

「忘れてないでしょうね？アタシが名の知れた殆どの拳法の有段者  
つてこと…」

指を鳴らしながら前田に近づくと少女。

体格では身長180位はある前田と150程の少女と、かなりの差  
がある。

体重も、体つきも前田の方が数段上。

だが、この実力差ではそんな物まったく意味が無い。

一応前田もそこそこの実力の持ち主だ。

この集団をまとめるリーダーなのだから、それは当然ではある。  
しかしこの少女の前では無力。

と、その時…

「う、うう…」

後ろで倒れていた前田の部下の一人がうめき声を上げながら目覚め  
た。

だが、少女はそれに気付いていないようだ。

あらかじめ別の部下が持ってきた、建設用の角材を拾い上げる前田  
の部下。

そして、それを勢いよく少女の頭に振りかざした！

「てめえ、死に晒せやあ！！！！！」

角材が少女に直撃した！  
鈍い音が辺りに響き渡る。  
そして…

バタツ…

アスファルトの上に倒れ、意識を失う。

前田の部下が。

確かに角材は少女の身体に直撃した。

少女の『肘』に。

角材をエルボースマッシュで粉碎し、その勢いで前田の部下を一撃  
KOしたのだ。

「ちとと、続きを…」

改めて前田の方を見る少女。  
しかし…

「く、覚えてる!！」

道路に倒れる多くの部下を無視しその場から離れる前田。  
もともと、この光景は既に見慣れた光景だったので彼女は何とも思  
わなかったが。

9

「いつも逃げられるなあ、半殺し位にしとけばいいんだと思うけど  
…」

そう言いながら携帯を見て時間を確認する少女。  
表示された時間は…

「七時二十分!?!ヤバい!！」

そう言いながら、持っていたポケットティッシュで振り返りを軽くふき取る。

そして、カバンと柔道着を抱えて少女は学校へと向かった…

## プロローグ（後書き）

『 電脳戦記まどか マギカ 救世のティマー達 』で今の章が終わったら東京のお台場をメインに戦う章（『お台場編』）を書こうと思つのですがどうでしょうか？もしあちらの小説を読んでくださる方がいたら、意見を頂けると嬉しいです。

## 登場人物&魔女紹介(前書き)

登場人物などの紹介です。

これから読む人には若干のネタバレがあるかもしれませんが。何となくイラストを追加してみました。

大体こんな感じです。

(また、登場人物の名前については殆ど「元ネタ」が存在します。暇な人は探してみてください)

## 登場人物&魔女紹介

『主人公サイド』

切札 きりふだ 勝美 かつみ

> i 3 1 5 6 7 — 4 0 0 1 <

見滝原中学の二年生

初登場話 プロローグ

この作品の主人公。

見た目は美少女、中身はこわい。

様々な拳法の有段者であり、恐るべき戦闘能力の高さを見せる。

前田の50人の部下を瞬殺するなどその実力は折り紙つき。

ハイミリオン・カラー 朱色 の長髪がトレードマーク。

一説ではツキノワグマも倒したとか…？

遊城梓芦 ゆうじょうしろう

> i 3 1 5 6 9 — 4 0 0 1 <

見滝原中学の一年生

初登場話 第一話

かつみの後輩。

白髪のサイドテールが特徴の小柄な生徒。

美術部員であり、そっち方面の腕はかなり高い。

しかし、ある日の帰り道に三年の先輩に襲われてしまう。

そして顔に一生消えない傷を負ってしまった。

キユウベえと契約し、魔法少女となった。

不動紫保

> i31570—4001<

見滝原中学の三年生

初登場話 第四話

かつみの先輩。

生徒会副会長であり、かなり厳しい。

また結構キツイ性格でもあり、不良生徒などを『クズ』などと罵ることがある。

その名前と同じく、紫色の髪をしている。

風間遊子

> i31587—4001<

見滝原中学の三年生

初登場話 第五話

かつみの幼馴染。

実家が神社であり、靈感が一族で最も強い。

そのため、将来を期待されているらしい。

しかし本人はそんなことを気にしている様子は無い。

> i 3 1 5 8 9 — 4 0 0 1 <  
全員集合

『不良・ヤクザグループ』

前田

見滝原徳丸高校の二年生

初登場話 プロローグ

かつみを襲った不良グループのリーダー。

50人の部下を瞬殺される。

あだ名は『ウルフの前田』。

来馬

見滝原中学の三年生

初登場話 第四話

梓<sup>しる</sup>芦を襲った犯人。

かつみにボコボコにされた。

『原作キャラ』

鹿<sup>かなめ</sup>目まどか

見滝原中学の中学二年生

初登場話 第一話

仁美と柔道の時間に組んでいたが、かつみとも組むことになった。  
今のところの出番は殆どない。

暁美ほむら あけみ

見滝原中学の中学二年生

初登場話 第七話

かつみ達のクラスに転校してきた少女。  
どこか不思議な雰囲気をする少女だが…

早乙女和子 さおとめ かずこ

見滝原中学の英語担当の先生

初登場話 第一話

かつみ達の担任の先生。  
余計な話が多い。

志筑仁美 しつき ひとみ

見滝原中学の中学二年生

初登場話 第一話

かつみに柔道の授業中に本気の技を喰らいダウン。  
病院に運ばれてしまった。

キユウベえ

初登場話 第二話

かつみと梓芦の前に現れた謎の生物。  
その目的は…？

『その他』

瀬道せどう亜衣アイ

中学二年生

初登場話 第八話

『魔法少女狩り』に有った少女。  
死にかけの所を梓芦に救われた。

魔法少女時は腰布やバンダナなどを身に纏った海賊風の服装になる。  
武器はサーベル。

『魔女』

化学の魔女

初登場話 第二話

性質は昇華。

かつみと梓芦が戦った魔女。

全身がスライム状の、蛇のような姿をしている。

大量の触手で攻撃も可能。

しかし、その特性が仇となり石膏攻撃とかつみの一撃で撃破された。

・かつては将来を期待されていた化学者だったらしい。

書物の魔女

初登場話 第五話

性質は追及。

かつみと紫保が戦った魔女。

本や紙を身に纏ったゴーレムのような姿をしている。

巨大な体と強大な力を持ったため一対一の直接戦闘は避けた方がいい。体中の紙が特徴であると同時に弱点でもある。

・かつては医者を目指していた少女だったらしい。

硝子の魔女

初登場話 第七話

性質は鮮明。

かつみ達がで戦った魔女。

梓芦のサポートを受けたかつみの一撃で粉々になった。

ビンのような姿をしているが、中の液体に浮かんだ小さな人形が本体だ。

・いろいろな物を大切にしていたとある少女が魔女化したらしい。

**登場人物&魔女紹介(後書き)**

随時更新予定です。

## 第一話 もしアタシなら 戦うね

前田の部下を全員倒し、学校へと向かうかつみ。

しかし、奮闘虚しく結局遅刻してしまった。

実はかつみが前田一味に襲われるようになったのは今月に入って三回目だったりする。

(そのたびに瞬殺しているのだが)

理由としては、前田の所属するグループのリーダーに因縁を付けた

(ほんの些細なことなのだが)と言うのが理由だ。

学校側には『不良に襲われている』とは言っていない。

(結果だけ見たらこちらが加害者と思われてしまったため、大事にしたいくない)

しかしその所為で既に今月に入って三回ほど遅刻をしてしまっている。

今日も職員室で朝から担任の早乙女先生にお説教を喰らうことになってしまった。

「今後は気を付けましょうね。…次は確か体育ですね。遅れないようにー!」

「はい!」

軽く注意を受け、職員室を出るかつみ。

一限目の授業は体育。

しかも、今行っているのは柔道。

彼女の最も得意とする教科だが：

「そうか、陸上は別の曜日だったっけ。柔道やりたくねえなー…」

そう呟きながら柔道場へと向かう。

何故、得意教科の体育を毛嫌いする必要があるのか？

それは授業が始まると同時にすぐに分かった。

皆と一緒に更衣室で柔道着に着替え、自身の朱色の長髪をゴムで止める。

そして帯を巻く。

『黒帯』を。

かつみは柔道、いや名の知れた殆どの格闘技の有段者なのだ。

柔道はもちろん、空手、合気道に少林寺拳法、テコンドー…

その他にも段は取っていないものの、幾つかの格闘技を経験したことがある。

(以前、力の加減を間違えて何人か病院送りになりかけたものもいる)

他のクラスメイトはそんなかつみを恐れて試合をしたがらないのだ。案の定、今日も一人だけ組手の相手を見つけられずに余ってしまった。

「そーだよ、どーセアタシは皆の嫌われ者だよー！」

半ばヤケクソ気味に叫ぶかつみ。  
別にかつみが嫌われている訳では無い。  
しかし、前述した事件やかつみの実力などから体育などでは自然と浮いてしまうのだ。

「あの、良ければ私達と一緒にやりませんか？」

そんなかつみを誘ったのは、同じクラスメイトの志筑 仁美だった。  
仁美はすでに友人の鹿目 まどかと組んでいたが、かつみを自分たちの組に入れることにしたのだ。  
相手も決まり早速、組手を始める。  
まずはまどかと仁美。  
まどかには完全素人なのだが、仁美は習い事か何かでやっているらしく型等もそこそこできている。

「仁美ちゃん強すぎるよ〜」

「ふふ、じゃあかつみさんお願いします」

「お、おう」

そう言っつて組手を始める二人。  
とはいっても、やはりどうしても実力差と言うのがはっきりとわか  
つてしまう。

完全に仁美の動きを読み、手玉に取るかつみ。  
そして隙を突き、後ろに回り技をかける。  
それはかつみの最も得意とする必殺技…

「てやあ！体落としー！」

体落とし…

相手を投げ落とす柔道の技の中でも割と基本的な技だ。  
小柄な体でも無理無くかけれることから、かつみはこの技を愛用し  
ている。

今回もうまく決まり、見事仁美相手に一本を取ることが出来た。  
しかし…

「仁美ちゃんの意識が無いよ…！」

「マジで…!?」

上手く効きすぎた。

打ち所が悪く、意識を失ってしまっってしまった仁美。

しばらくして何とか意識は戻ったが、脳波に異常がないかを調べるため病院に送られることになった。

（ちなみにこの時、同じく病院に入院していたクラスメイトの上条恭介に恋するのだがそれは別の話）

仁美が病院に運ばれ、授業も中途半端な所で中断してしまった。

「（後で病院にいつて謝りにいこう）」

そう思いながら、その後の授業をこなすかつみ。

そして放課後…

今日は部活はやらずにそのまま病院に行くことにした。

かつみは柔道部や空手部など幾つかの部活を掛け持ち（元々は柔道部だったが、別の部活に助っ人として呼ばれることがある。大会が近いのでなおさらだ）しているので部活が結構忙しかったりする。

部活の顧問に理由を話し、部活を休む許可ももらった。

校門を出て、病院へと急ごうとするかつみだが…

「かつみさん…」

校門前でかつみを呼ぶものがいた。

かつみよりも小柄な白髪のサイドテールの少女。

頬に大きな絆創膏が張られており、怪我でもしているのだろうか…？

「しろ！どうした？」

しろと呼ばれた少女、本名は遊城梓芦。

かつみの後輩の美術部員だ。

一年生だが、上級生に絡まれていた所をかつみに助けられて以来、何かと一緒につきあうようになった。

「ちょっと話したいことがあるんです…」

「ああ、いいぜ。でもこの後病院行かないとだめだから、そこまでな」

頷く梓芦。

だが、何か様子がいつもと違う。

いつもと違い、今日は何か元気が無い様に感じる。

いや、生気が無いと言うべきか…

それに頬の大きな絆創膏は一体どうしたのか？

何か聞こうとも思ったが、どう聞けばいいか分からない。いきなり聞くのも何か失礼な気がする。

一緒に歩いているうちに、梓芦は自身の重い口を開けた。

「私…昨日、学校の帰り道に三年生の先輩に襲われたんです…」

「…マジか？」

梓芦の口から出た言葉に、思わず聞き直すかつみ。

頷く梓芦。

頬の絆創膏はそう言う事だったのか…

言われてみれば、足などに青いアザも見える。

「辺りは暗かったし、助けも呼べませんでした。いろいろ痛いこと  
されて…」

「……………」

涙ぐむ梓芦。

かつみはそれを黙って聞くことしかできなかった。  
どのようなことをされたかは容易に想像がついた。  
それだけに、どう話せばいいか分からなかった。

「痛いのは我慢できました。その時だけ耐えればいいんですから…  
でも！」

そう言って頬の絆創膏を取る梓芦。  
恐らくその時に付けられたのだろう。

そこには、見るも無残な傷の跡があった。  
血は止まっているが、切り傷の様な跡がギサギザについている…

「地面に押し倒されて、その時に頬を落ちていたガラスの破片で斬  
ってしまっただんです」

「……」

「この傷は深すぎて、整形で治すことすら難しいと言われました…」

27

中学、高校生と言うのは、人生の中でも特に大事に時期だ。  
勉強、遊び、そして恋愛。

そんな中、梓芦が受けた苦痛は計り知れたものではない。  
痛み、苦しみ、恐怖…

そして、一生顔に残り続ける傷…

「かつみさん…かつみさんなら私と同じ境遇になったらどうします  
か？」

「…さあな。でももしアタシなら、戦うねー！」

「戦う…?」

「そうさ。どんな方法でもいいからそいつに一撃与えてやれ！」

思わずいつものノリで言ってしまった。

本当はもっといべきことがあるのかもしれない。

だが、今のかつみにはその言葉が分からなかった。

梓芦は足を止め人通りのない路地を見つめる。

そして、何かに誘われるようにその裏路地へと入っていった。

「お、おい病院はそっちじゃ…」

だが、梓芦にその言葉は届かなかった。

ふらふらと裏路地の奥へと入っていく。

しよすがなく、かつみは梓芦の後を追掛けた。

「（なんだ？どうしたんだ、しろの奴？）」

そう思いながら、後を追いかけるかつみ。

たしか、この路地を抜けた先は古い化学工場があったはずだ。何十年か前はこのあたりの産業を代表する建物だったらしい。しかし、今では廃業し工場もただの廃墟と化している。めったに人も立ち寄らず、荒れ放題の場所だ。

「（そんなところに…何で？）」

路地を抜け、廃工場のある広場へと出るかつみ。辺りを見回すと、梓芦はその廃工場の扉を開け中に入ろうとしていた。

この工場の中は昔の機材が今でも残っており、立ち入り禁止になっている。

しかも、建物の柱や屋根が老朽化しておりいつ崩れてもおかしくは無いとまで言われている。

そのため立ち入り禁止区域に指定されているのだが…

「お、おい！しろ！」

かつみが叫ぶも、梓芦には届かない。

工場へと入っていく梓芦。

このあたりは再開発地区に指定されているためこの時間帯に人は居ない。

そんな中、廃工場の中で事故が起きたら満足に助けも呼べない。

携帯は家に忘れてきてしまったし…

「力づくで連れ戻すしかないか…」

そう言っつて廃工場の扉を蹴破り中に入るかつみ。

中には古びた機材や錆びついた機械などが所狭しと置かれている…

そう予想していたかつみ。

しかし、彼女の目の前に広がる光景は予想とは、はるかに異なるものだった。

「な、何だよこれ…」

そこに広がるのは、この世の法則を無視したかのような空間。

底知れぬ絶望が支配する世界だった…



## 第二話 砕ける！！

梓芦を追掛けて街外れの廃工場へとやって来たかつみ。

だが、工場の中はかつみが想像していた空間とははるかに異なっていた。

この世のものとは思えない、幻想的で不気味な光景が目の前に広がる。

空中には、巨大な実験器具のフラスコやビーカーなどが浮かび、地面には薬ビンや薬包紙などが乱雑にばら撒かれている。

まるで、実験室に置かれている器具を適当にばら撒いたかのような空間だ。

「一体これは…!?!」

目の前に広がる世界は本当に現実なのか？

あまりにも信じがたい光景なため、思わずそう思うかつみ。

念のために壁を軽く殴ってみた。

…痛みを感じた。

つまり、この光景は夢なんかでは無く『現実』に起きていることと言ふことになる。

目の前の光景をいまいち信じきれずも、とりあえず梓芦を探すことにしたかつみ。

こんな不気味な空間に長居する気は無いが、梓芦だけは連れ戻したかった。

「（何なんだこの空間は、少なくとも廃工場では無いな）」

走りながらそう思うかつみ。

改めて辺りを見回しても、不気味な世界が広がるばかり。  
薬ビンを置いた棚や大きなタンクなど…

しかも、それらの影から小柄な『何か』の影が見える。  
怪しい気配も感じる。

この感じを、かつみは何度も感じたことがある。  
以前、ヤクザや前田の部下に囲まれた時と同じだ。

「（殺気…！）」

殺気を感じ取ると同時に、物陰からその殺気の主が飛び出しかつみに襲いかかった。

その攻撃を軽く避け、相手との間合いを取る。

だが、その攻撃の主に驚くかつみ。

かつみを攻撃したのは…

「なんで…私だけ…」

かつみを攻撃したのは、この工場に入り行方が分からなくなっていた梓芦だった。

鉄の棒を両手で持ち、それをかつみめがけて振りかざしたのだ。

「し、しろ！おまえ…」

そう言っている間にも、梓芦は容赦なくかつみに鉄の棒で殴り掛かる。

しかし、それらは全てかつみに避けられる。

無理もない。

かつみは気配だけで相手の未来位置をある程度予測することも出来るほどの達人。

暗闇で後から奇襲されても、ある程度なら反撃可能だ。

それに対し、梓芦は格闘技等に関しては全くのド素人。

持っている鉄の棒もかなり大きく、梓芦の方が鉄の棒に振り回されている印象さえ受ける。

しかも、今の梓芦はどこか様子が変わる。

目も虚ろで、まるで感情が無い様な…

そんな感じが。

「なんで…私だけ…なんで…なんで…！！」

「(くっ… 一体なんなんだよ!!)」

どうしたらいいかわからないかつみ。

このままこの訳の分からない空間で逃げ回っているわけにもいかない。

ならば…

一瞬の隙を突き、梓芦の背後に回るかつみ。

梓芦の後頭部に一撃を喰らわせる。

「あ…！」

「しばらく気絶しててくれ」

その場に倒れこむ梓芦。

梓芦を抱え、この空間の出口へと向かおうとするかつみ。

しかし、出口が分からない。

さっき入ってきた入り口は、梓芦から逃げる内にどこにあったか見失ってしまった。

他に出口があるかわからない。

仕方がないので、地道に探すことにした。

梓芦を抱えながらなので少し辛い、それも仕方がない。

いくら梓芦が小柄とは言え、人間一人を抱えながら歩くと言つのは結構疲れる。

「くっ、その出口はどこだ！」

そう言いながら辺りを探すかつみ。

いくら探しても出口が見つからない。

そう言って歩いているうちに、ごちゃごちゃとした空間から広間へと出たかつみ。

ここが、この空間の中心部なのだろうか？

先ほどまでの空間に有った乱雑に積まれた薬品やビーカーなどはここには無く、ただ広い空間が広がるのみ。

ゆっくりとその中に入っていこうとするが…

「う、うわー！」

突如、大きな地鳴りが当りに響く。

まるで大きな地震が起きているようだ。

それと同時に、地面が割れ中から巨大な『化物』が現れる。

ゆうに10mはあるだろうか？

スライム状の、大量の触手を持つ蛇のような姿をした異形の化物が…

「き、気色悪い！！！！」

かつみが思わず叫ぶ。

その声に反応したのか、化物はかつみの方へと触手を伸ばす。それを何とか避けるも、梓芦を抱えながらでは結構きつい。

梓芦をこの空間の入り口の方へと置くと、再びかつみは化物の前へと出る。

「（こいつがこの世界の親玉ってわけか。そう言う感じがするぜ）」

この化物を倒さなければ自分たちはこの世界から抜け出すことは出来ない。

そう感じたかつみは、ある決意をした。

『この化物を倒す』、と。

梓芦がおかしくなったのもコイツの仕業に違いない。

そう思うと、かつみの胸に怒りが込み上げてくる。

「うおおー!!!」

襲いかかる触手を全て避け、本体へと近づぐ。

勢いをつけ化物の頭部へと跳びかかる！

そして、全身の力を込めたかかと落としを化物に喰らわせた!!!

しかし…

「な、攻撃が…効かない!!」

相手は全身スライムの化物。

打撃系の攻撃は全て衝撃を吸収されてしまうのだ!

何とかもう一撃を与えようとするが、それも虚しく触手に掴まってしまうた。

人の腕程の触手をぐるぐるに巻かれ、動きを封じられるかつみ。抵抗するが、一向に解放される気配はない。

さらに、化物はかつみを自身の体内に放り込んでしまった!

スライム状の化物の体の中に取り込まれてしまったかつみ。何とか出ようとすが、全く手ごたえを感じられない。

「(くそ…早くここから出ないと…息が…)」

化物の体内に取り込まりてしまい、必死でもがくかつみ。この体内に酸素はせず、息をしようにもできない。

「(ぐ…意識が…)」

意識が徐々に遠くなっていく。  
その中で今までの思い出が走馬灯のように流れる。  
幼い頃、家族全員で一緒に過ごした頃…  
部活の合宿の時、山で遭難したこと…

このままでは間違いなく死ぬな…

みんなごめんな…

梓芦はどうなっちまうんだ…

早乙女先生、別に食事の好みなんて人それぞれだろ…

前田、うざかったなあ…

そう思いながら確実に視界が暗くなっていくのを感じる。  
まるで暗い海に沈んでいく気分だ。  
完全に視界が暗くなった…  
その時…

「たあ！！」

何者かが、取り込まれていたかつみを化物の身体から押し出した！  
思い切り地面に叩きつけられるかつみ。  
しかし、体にへばりついていた化物のスライムの破片のおかげで怪  
我をする事は無かった。

「ゲホ！！ゲホ！！！！…一体なんだ？」

一体何が起きたのか理解できない。  
誰かが助けてくれたのか？

しかし、今ここにはこの化物と自分、そして梓芦しかない。

まさか…

そう思い、化物の方を見るかつみ。

そこにいたのは、全身に白と透明の衣装を纏い空を舞う梓芦だった。  
まるで、子供向けの漫画やアニメの主人公のようなその姿。  
右手に1メートルはある大きな筆を、左手にはパレットを持ってい  
るのは美術部員の梓芦らしいと言えばらしいが…

「しろ！！おまえ、その恰好！？」

「説明は後です！今は魔女を倒すことが先です！」

「魔女…？」

良くわからないが、この化物が『魔女』と言うのか…  
だが、スライム状の身体にかつみの攻撃は全て効かない。  
攻撃を加えても、先ほどのように吸収されるのがオチだ。

「相手はスライム、それなら…！」

そういつと、梓芦は手に持った巨大筆で空に大きな円を描く。  
魔女をすっばり包み込むほどの大きな円を。

「固めてあげるわ…！」

その円の中から現れたのは、大量の白い粉だった。  
粉は魔女に振りかかり、魔女を真っ白に染めていく。  
巻き添えを食わないように、入り口の所にかくれる梓芦とかつみ。

やがて粉が収まった。

そして入り口から恐る恐る覗いてみると、そこにいたのは…

「じ、これは…！」

全身を白く染まり、まるで石膏像のように動かなくなった魔女の姿だった。

だが、自重により全身にひびが入っている。  
今にも崩れそうだ。

「すげえ、石膏像みたいになってるぜ。しろ、さっきの粉は…？」

「そのまま、石膏です。ただし、私が作りだした超速乾性の物ですけどね」

「そう言う事が…よし、今なら！」

そう言うのと、かつみは勢いよく物陰から飛び出し魔女へと近づき、先ほどのように大きく跳ぶ。

そして、魔女の身体の最もひびの集中している部分へと思い切りの一撃を加えた！

「これでどうだ!! 砕ける!!」

その攻撃により、ひびは徐々に多くなりやがて魔女を包んでいく。それは、さながら昆虫がさなぎから羽化する時のようだ。

だが、ここから新たな命は生まれない。魔女の身体はボロボロとまるで壊れかけの土壁のように崩れ去ってしまった。

それと同時にかつみたちを包んでいた空間も消える。辺りは古い廃工場へと戻っていった。

既に日は沈み、月の光だけが廃工場に差している。

屋根のトタンは所々剥がれ、窓のガラスも割れている。

其の為だろう。

この光景も先ほどの空間ほどではないが、幻想的だ。かつみは早速先ほどの出来事を、そしてその恰好について梓芦に訊いた。

「まあ、いろいろ聞きたいんだけど…まずその恰好は何だ？」

「ええつと…」

「それにさっきの化物は？魔女って言うてたけど訳が分からねえし」

「うーん…?」

「一番最初、なんでお前はアタシに襲ってきたんだ?それも分かんねえよ」

頭をさすりながら、どこから説明すればいいか迷う梓芦。しかしその二人の前に『一匹の獣』が現れた。白い体毛に身を包んだネコのような真紅の眼をした生物。だが、どこか異様なオーラを出すその獣の名は…

「あ!キユウベえ!」

『キユウベえ』と呼ばれたその生物は梓芦の元へとやってくると、その胸の中に飛び込んだ。頭を撫でられながら、気持ちよさそうな顔をしている。

「な、何だソイツ?」

「これ?これはキユウベえって言うんです」

「そっじゃなくて」

キュウベえは梓芦の胸中から降りると、かつみに対し自己紹介を始めた。

「どうやら、このキュウベえと呼ばれる生物は人間との会話ができるようだ。」

『ぼくはキュウベえ。君たちのような少女にお願いがあつてこの世界に来たんだ』

「ど、どういふことだよ…?」

『とても簡単なことだよ。君も僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ!』

## 第二話 砕ける！！（後書き）

梓芦は梓芦しよって呼びます。

結構多く出てきているので…

（一話と登場人物紹介にフルネームは出ていますが、一応）

### 第三話 なにそれこわい

かつみと梓芦の前に現れた白い獣。

人語を理解し、人と対話するソイツの名は『キュウベえ』といった。先ほどの工場内で戦った『魔女』という物といい、訳の分からない物が多すぎる。

今日会った多くのことが、かつみの頭の中を駆け巡る。

『君も僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ!』

そう言う白い獣キュウベえ。

契約…?

良くわからないがそれをすれば『魔法少女』という物に成れるという事か？

…ここがかつみの頭の中で先ほどの梓芦の言った言葉が蘇る。

「（確か、さつきしろはまるで魔法みたいな技を使ってた…それに今のしろの恰好…）」

先ほどの魔女に喰らわせた石膏責め。  
あれはまさに魔法だったのではないか？  
それに梓芦は空を飛んでいた。  
かつみは改めて、梓芦の姿を見た。  
そう言われてみれば、今の梓芦の姿はまさに『魔法少女』と言った  
姿だ。

「しろ、お前まさか…」

「はい。私はキュウベえと契約して魔法少女になったんです！」

あの魔女との戦いの時、魔女に取り込まれていたかつみを救えるの  
は梓芦だけ。

しかし、梓芦にそのような力は無い。

そこに現れたのがキュウベえだった。

キュウベえは梓芦に魔法少女についてを簡潔に話すと、契約を促し  
た。

あの時、魔法少女となった梓芦がいなければ確実にかつみは死んで  
いただろう。

『魔法少女となった者は、その生涯を賭けて魔女と戦う使命を背負  
うことになる。しろ、君はその覚悟が出来ていた…』

「あの時、かつみさんを助けられるのは私しかいなかったんですから…当然です」

「しろ…アタシを助けるために…」

魔法少女は魔女を倒すために戦い続ける。  
当然、今の梓芦もその宿命には逆らえない。

「ありがとうな…それにごめんな。お前にそんな重い物を背負わせちまって…」

「いいえ、いいんです。それに元はといえば私があんな工場に入つたのが原因なんですし…」

あの時、何故梓芦は工場に入つていったのか？  
中に魔女がいたことから、魔女が梓芦を引き寄せたのか？  
だとしたら何のために？  
そもそもどうして梓芦だったのか。  
あの時のことを何か覚えてないか、梓芦に尋ねた。

「うーん、それが何も覚えていないんです、かつみさんと一緒に

話してたところまでは覚えてるんですが…」

「そうか。じゃあいつたい何で…」

『たぶんそれは「魔女の口づけ」が原因だよ』

キュウベえが言った『魔女の口づけ』…

それは魔女が特定の人間の精神を操ったり、異常にしたりするとき人間につける刻印のようなモノだ。

あの時の梓芦は、襲われたことを思い出し感情が一時的に憎悪や悲しみで満ちていた。

そこを魔女につかれたのだろう。

『魔女は人々に災厄や絶望、悲しみをもたらす存在。倒さなければ被害を受ける人々は次々増えていくよ』

「魔女…許せねえな!!!」

そう言うと、かつみは己の拳を握りしめる。

元来、曲がった者が嫌いな性格。

人に災いをもたらすそのようなモノの存在を許すことも出来なかった。

よく言えば正義感あふれる人物。

悪く言えば単純な性格だが。

「よし！アタシも魔女退治に協力してやるよ！」

「か、かつみさんも!?」

「まず魔法少女って何なんだ？契約って何をするんだよ？」

かつみはまだ魔法少女の事をほとんど知らない。

いや、それは梓芦も同じ。

先ほどはかつみを救うために急いで契約したため、キユウベえからは殆ど説明も聞かず魔法少女となってしまった。

そのため、二人とも魔法少女についてはその実態をほとんど知らないのだ。

キユウベえは二人に簡単な説明を始めた。

『まず、魔法少女が魔女と戦う宿命を背負うというのは話したね』

「ああ。しろはずっと戦い続けなきゃならないんだろ？」

『何故戦い続けなければいけないか？それは彼女の持つ「ソウルジエム」の穢れを取るためなんだ』

そう言われ、梓芦はキュウベエの言った『ソウルジェム』を取り出した。  
卵のような形をした宝石に美しい装飾が付けられた物だ。  
だが、その宝石は透き通っているというわけでは無く少し濁った感じがする。

『魔法少女が魔法を使うたびにこのソウルジェムは穢れて行く。その穢れを取るために魔女を倒し「グリーンフィード」を得なければならぬんだ』

「かつみさん、これがグリーンフィードです」

グリーンフィード…

ソウルジェムとは異なりどこか異様な雰囲気な物体だ。  
黒く染まった木の実のような、植物の種のような…  
梓芦はそれをソウルジェムに近づけた。  
すると、ソウルジェムの濁りが段々と消えて行った。

「おお〜」

『穢れを取らないと大変なことになるからね』

「大変なことって何だ。爆発でもするのか？」

「かつみさん、いくらなんでもそれは…」

『うん爆発するよ』

「なにそれこわい」

「ど、どういうこと？キユウベえ!？」

梓芦に訊かれ、キユウベえは更なる詳細を話した。

正確にはソウルジェムが砕けてしまう。

ソウルジェムとは魔法少女の魂を結晶化したもの。

それが砕けてしまったとき、魔法少女は死を迎える。

そして、その砕けたソウルジェムはグリーンフィードへと変わり魔女へとなるのだ。

「え〜っと魔法少女が魔女で魔女が魔法少女で爆発して…」

「つまり、魔女を生み出しちゃうからソウルジェムに穢れを溜めてはいけないってことですね。」

「魔法を使う以外で穢れが溜まってしまっことはあるのか？全部話せよー!!!」

キユウベいの肩(?)を掴みブンブン揺らすかつみ。  
爆発の部分以外あまり理解していないが、とりあえず穢れを溜めると大変なことになるということは分かった。  
もし後になって変に穢れを溜めてしまつては後悔することになる。  
今のうちに効けることは聞いておいた方がいいだろう。

『わかつた！わかつたよ！』

「よしそれでいいんだ…」

「(かつみさん怖いな…)」

『穢れが溜まるのはずっとソウルジェムを放置していた時さ。グリ  
ーフシードを得なければ自然と溜まつてしまふ。それと…』

「それと？」

『魔法少女が果てしない絶望を味わったとき、ソウルジェムは黒く  
濁つていく』

「なにそれこわい」

『さあかつみ、君も魔法少女になるのかい？』

そう言われ、思わず魔法少女となった自分を想像するかつみ。  
梓芦はその名と髪の色を通り『白色』をベースとした色のコスチュ

「ムに身を包んでいる。  
なら自分もそうなるのか…？  
自身の髪と同じ、朱色の装束を身に纏うかつみ…  
…ちよっと似合わなかった。」

「魔法少女は…やめておく。似合わなさそうだしな。でも！」

握りしめた拳で工場に置かれていた古い機材を思いきり吹き飛ばした！

2〜3mはある巨大な機材はバラバラに碎け散り、残った一部のパーツも壁に叩きつけられる。

「アタシにはこの力がある。しろが魔法なら、この拳がアタシを守る力だ！」

『拳ねえ。まあ別に強制はしないよ。ただそれでいつまで戦って行けるか…？』

「そうですねよ！やっぱり契約しておいた方が…」

かつみが幾ら強いとは言っても、それは『常識』という範囲内に過ぎない。

戦う相手はその『常識』という物を超えた存在。

魔女なのだ。

そんな存在に単なる一個人がどう立ち向かおうというのか…

魔法少女にも幾つかリスクは存在するが、生身で戦うよりはずっと  
ました。

「魔女化やソウルジエムが砕かれたら即死とか、いろいろ弱点ばかり。利点は無いのか？」

『もちろんあるよ。魔法少女に契約する時、その少女の願いを僕が叶えるのさ』

そう。

これこそが魔法少女になる最大のメリットともいえる。

よほど滅茶苦茶な願いでもない限り、キュウベえは願いを対価として叶えてくれる。

もつとも、それが魔法少女の宿命と釣り合うかどうかは分からないが…

『それに怪我をしても魔力で修復すればすぐに直すことも出来る。さすがに病気とかは無理だね』

「なんだ、結構利点もあるじゃないか！」

『気が変わったかい？魔法少女になってよ！』

「それはやめておく。今叶えたい願いも無いし…」

「そうですか？例えば柔道の全国大会優勝とか…」

「願いで行くってというのはなんか自分の力を裏切るみたいでちょっと…」

他に叶えたい願いも今のかつみにはない。

願いで力を得てもそれは今の自分を裏切ることになる。

『叶えたい願いが無い人間というのも珍しいね。…気が向いたらいつでも呼んでよ。すぐに契約してあげるから』

そう言うと、キュウベえは夜の闇へと消えて行った。

かつみ達も、いつまでもこの廃工場にいるわけにはいかない。

今日はもう帰ることにした。

「じゃあな、しろ」

「はい。魔法の力…これでかつみさんに言われた通りのことが出来

ます」

「へ？」

「明日、私を襲った先輩をこの魔法で…」

「ちょ…ちょっと待って!!！」

「何ですか？」

確かに戦えとは言ったが、あれは勇気づけるためであってまさか本気で言ったわけでは無い。

それに、いくら相手が最低な野郎とは言え魔法と人間じゃ（かつみ以外では）かなりアンフェアな戦いになる。

それに何より、そんなことを梓芦にさせて彼女の手を汚させたくないかった。

「いくらなんでも一般人相手に魔法はまずいだろ!!！」

「まあそうかもしれませんが…」

「…アタシに任せてくれよ。全部肩を付けてやるから!!！」

普段喧嘩慣れしているかつみなら、大丈夫だろう。

いろいろな意味で。

かつみは梓芦に、『一般生活で魔法は出来る限り使つな』と言いつの場を後にした。

翌日、梓芦を襲った先輩はかつみにボコボコにされた。

全治一か月の重傷だったらしい…

## 第四話 精々半殺しだから

あの魔女の戦いの翌日…

かつみと梓芦は昼食時に学校内の学食で話をしていた。

梓芦に襲った先輩をボコボコにしたと言う事を…

「別にお前は手を汚さなくてもいいんだよ。アタシはこういつの慣  
れてるからさ」

「は、はあ…」

「そつえばしろ、お前はキュウベえに何を願ったんだ？」

叶える願いが無ければ魔法少女にはなれない。

ということとは梓芦にも何らかの願いがあったということだ。

それはいったい何なのか。

と、そこであつみはあることに気が付いた。

…梓芦の顔に張られていた大きな絆創膏が無くなっていたのだ。  
もちろん、あの大きな傷もなくなっている。

昨日帰り道で見たときは確かに有ったはずだ。

ということとは…

「私がキユウベえに願ったのは『傷つけられた身体を元に戻してほしい』…です」

「傷つけられた身体、か…」

「はい。あ、でももう大丈夫ですから！この通り治りましたし、かつみさんが仇を取ってくれましたから…」

そう言いながら、無理に笑顔を作る梓芦。

いくら相手を叩きのめしても、いくら身体を治してもらったとしても、あの時受けた『心の傷』までは治せない。

これから先、今回のことが梓芦のトラウマにでもならなければいいのだが…

「でもかつみさんは大丈夫なんですか？そんなことして先生にもばれたら…」

確かに相手を喧嘩で叩き潰したなどと学校側に知れたら大変なことになる。

かつみは柔道の県大会などでもかなり高成績を収め、全国大会にまで出場したこともある。

そんな者が傷害事件沙汰を起こしたと各地に知れ渡れば、最悪新聞の一面を飾るかもしれない。

だが、かつみの顔はいたって平気そうだ。

「大丈夫だいじょうぶ。ちゃんとアタシがしたってわからないようにして…」

と、ここまで話したところでかつみの言葉は遮られた。

「そうかしら、切札勝美さん？」

かつみと梓芦の座っているテーブルに、一人の女子生徒が現れた。紫色の髪と銀色の眼鏡が特徴的な、どこか高圧的な雰囲気のある彼女。

かつみと梓芦はこの少女が誰なのかを知っていた。

この見滝原中学の生徒会執行部副会長…

「あなたは…不動紫保先輩！」

梓芦が叫んだ。

もしかしたら今の話を聞かれていたのか？  
最初のキユウベエの話や今のケンカの話など、いろいろと聞かれてはいけないことを話していた二人。  
しかも相手は生徒会一蔵しいということまで有名な紫保先輩。  
正直、先生に今の話を聞かれても冗談半分に済ませることが出来るがこの先輩相手にはそもいかない。

「切札さん、ちょっといいかしら？」

かつみを呼び出す紫保。  
梓芦はそれを止めようとするが…

「あの、先輩…」

「あなたに用は無いわ」

梓芦にそう言い放つと、紫保。  
やはり先ほどの話が問題だったのだろうか？  
紫保はかつみを生徒会室へと連れて行った。

「あの、アタシに何の用ですか？」

かつみが言った。

生徒会室には紫保とかつみ以外は誰もいなかった。

てつきり生徒会役員と先生によって吊るし上げでも喰らうのかと思  
つたが…

「あなた、今日三年生の生徒と喧嘩したそうね」

「えッ！…！！さ、さっきの話聞いていたんですか…？」

「…相手は三年の来馬隆文…かなりひどい怪我を負ったそうよ…」

紫保が一枚のプリントを見ながら言う。

そのプリントには、かつみの喧嘩についての詳細が描かれていた。

かつみは来馬を体育館裏に呼び出し、秒殺。

その後、自分がしたとばれない様に校舎の二階からポロポロになっ  
た来馬を下に落としたのだ。

（さすがにそのまま落とすのはまずいので植木の上に落としたのだ  
が）

かつみは『事故』に見せかけた怪我にしたかったらしい。

そして去りざまに、まだ意識のある来馬に

「二度としるに近づくな。…本当に殺すぞー!」

…そう言っつて。

「まあ別にあなたを責める気は無いわ。あのクズのストーカー行為には生徒会としても手を焼いていたし…」

「はあ…」

「虫を潰してくれたことに感謝してるくらいよ」

「そうですね…（結構きつい性格だな…）」

どうやら、叱られるというわけでは無いようだ。

その後の話によると、このことは紫保の方で事故として片付けてくれるようだ。

元々、かなり悪質なストーカーを何回かしていた来馬。

だが、どれも決定的な証拠が見つからず注意も出来なかった。

しかし今回のことで少しは懲りるだろう。

「そこでひとつ提案があるの。…切札さん、生徒会に入らない？」

紫保の本当の目的、それはかつみを生徒会に引き入れることだった。柔道部のエースのかつみがいれば生徒会としても華がつく。あまり複数の部活などの掛け持ちは推奨されてはいないが、すでにかつみは幾つかの部活の助っ人として活躍している。生徒会も『その延長』として入ってほしいのだが…

「えー…それはちょっと…」

「あら？どうして？」

かつみにもいろいろと予定等がある。

柔道部や他の部活の助っ人など…

これからの季節は大会前なので結構忙しくなってくる。

そして最も重要な事。

梓芦と共に魔女と戦うという使命が…

「ま、まあそういうことでアタシは遠慮しておきますー!!」

そう言っと、かつみは生徒会室を急いで後にした。

一人生徒会室に残される紫保。  
窓から外を見つめながら紫保は小さく呟いた。

「切札勝美…彼女を何としても生徒会に引き入れてみせる…！」

.....

放課後…

空は夕焼けに染まり、学校にいた者達も皆帰宅の準備を始めている。  
今日は職員会議のため全ての部活が休みらしい。  
学校から多くの生徒たちが出てくる。  
その中に、かつみと梓芦の姿もあった。

「いやー昼は参ったよー」

そう言いながら生徒会室での出来事を話すかつみ。  
事件の事を隠してもらったことや、生徒会に誘われたことなど…

「かつみさん、幾らなんでも来馬先輩を二階から突き落とすのは…」

「大丈夫だって！死にはしなかったから。精々半殺しだから」

「そう言うつ問題じゃ…」

とその時、校門を出ようとしたかつみと梓芦の前に紫保が立ちはだ  
かった！

校門の上から飛び降り、彼女たちの前に現れる紫保。

結構な高さの上にバランス感覚まで要求されるような場所に彼女は  
一体いつからいたのか…

ここを通るまで気づかないかつみ達も妙だが、こんなところで待っ  
ている紫保はもっとおかしい。

実は変人なのだろうか？

「切札さん！生徒会に入りなさい！」

「え、ええ？」

「い、一体どういことなの…？」

戸惑うかつみと梓芦。  
ここで断つても彼女の性格から、絶対に退かないだろう。  
それなら…

「は！」

紫保の隙を突き、勢いよく学校の外に飛び出すかつみ。  
何とか紫保から逃げようと駆け出す。  
陸上の成績は学年でもトップクラス。  
直線距離ならだれにも負けない自信がある。  
100m13秒ジャストはかなり早い！  
あつという間に校門が見えなくなる。  
梓芦には少し悪いことをしたが、これも紫保から逃れるためだ。  
街外れの公園まで行ってようやく足を止めるかつみ。  
さすがにここまででは追ってこないだろう…  
そう思っていたが…

「私が陸上部女子最速ということを知らないの？」

「し、しまった！そうだった！！」

紫保は女子陸上部の最速選手でもある。  
かつみに追いつくことなど訳ないのだ。

「さあ、はやく生徒会に入りなさい！」

「だから入らないって言うてるじゃないですか！！」

生徒会参加の紙をかつみに押し付ける紫保。

「~~~~~」

「先輩やめちくり」

そう言いながら公園内を逃げ回るかつみとそれを追掛ける紫保。  
逃げ回っているうちに日は徐々に暮れ、公園の時計が七時ちょうど  
を刺した。

その時…

「きゃあー!」

「な、何だ!？」

公園を闇が包み込んでいく。

夜の闇よりも暗い闇だ。

そして、そこに現れたのは以前廃工場に現れたモノと同じ…

まるで図書館の書物倉庫のように大量の本が積まれた空間。

天井、壁、あらゆるところに重力を無視し、本が置かれている。

そう、これこそ魔女が己の身を隠すために張る、己の世界。

『魔女の結界』だった…

## 第五話 燃えるおおおお！！！！

かつみと紫保の前に現れた魔女の結界。

二人はその結界の中に取り込まれてしまった。

結界内には大量の本が重力を無視し置かれていた

天井、壁、あらゆるところに…

「一体何なの？これは…」

紫保はかつみと違い、魔女の事を知らない一般人だ。

突如目の前に起きた『異常』に対応できず、周りをきよろきよろとみている。

大量の本棚と本…

そのうちの一つを紫保は手に取った。

随分と古い本だ。

紙も普通の紙ではない。

歴史の授業で習った『羊皮紙』という物だろうか？

中身もドイツ語（？）らしき言語で書かれていて読むことが出来ない。

だが、辛うじて医術書か何かの類であることは理解できた。

一方かつみは、この状況をどうするかを考えていた。

「（戦うか…？）」

梓芦がない今、頼れるのは魔法では無く『力』と『頭脳』のみ。どうせ倒さなければこの結界からは抜け出せない。そうなると当然、紫保の力も必要になる。

「切札さん、ここは一体…」

「先輩、アタシが今から言う事全部信じてくれますか？」

「な、何よ。いきなり…」

かつみは紫保の力を借りるために、この空間が『魔女』と呼ばれる存在によって生み出されたものだと説明した。

以前キュウベえが、かつみと梓芦に説明したことをそっくりそのまま言ったのだ。

そして、その魔女を倒さなければこの結界からは抜け出せない。魔女を倒すために紫保の力を貸してほしい…とも

「…魔女ねえ」

そんな物信じられない、そう言った表情をする紫保。  
確かに、いきなりそんなことを言われて信じると言う方がどうかしている。  
とその時…

「まずい！ヤツが来た！」

「ヤツ？」

「魔女です！あそこに隠れましょう！」

そうかつみが言うと、二人は本棚の影に隠れた。  
徐々に大きな足音のような轟音が近づいてくる。  
二人が恐る恐る物陰から魔女を覗く。  
その魔女は、全身を本や紙に纏った巨大なゴーレムのような姿をしている。  
10mは軽くあるだろう。

しかも、以前の魔女と違いこちらは二足で立っている。  
その威圧感以前の魔女の比ではない。  
感じたこともない恐怖を味わう二人。  
だが、幸いこちらには気づいていない。  
彼女たちの前を通り過ぎて行った。

「あ、あんなのどうやって倒せばいいのよ!」

紫保が震えながら言った。

確かに見たところかなり強力な力を持った魔女のようだ。

一対一で戦ったらかつみでも勝てないかもしれない。

いや、格闘勝負でも確実に負ける…

しかし、そこは頭脳でカバーするしかない。

二人は梓芦のように魔法は使えない。

つまり、魔法以外の力で倒すしかない!

「アタシが突っ込んで勝てるかどうかは分からないし…」

「何か武器になるものは無いかしら?」

そう言って辺りを探す紫保とかつみ。

しかし、あるのは本と本棚、そしてそれを読むために置かれたであろうイスとテーブルのみ。

イスを壊せば武器にはなるかもしれないが、そのような物である魔女を倒せるとは思えない。

とりあえずそのイスに座り、作戦を練ることにした。

しかし武器になる物も無ければ力でも勝てない…

万事休すだ。

「携帯は…繋がるわけないよなあ…」

かつみは梓芦に何とか連絡を取れないかと試みるが、もちろん圏外だった。

梓芦さえいればどうにかなったのかもしれないが…  
紫保も携帯を取り出そうと自分のカバンを手取る。  
だが、なかなか見つからない。

中に入っている物を全てかき出し、ようやく見つけることが出来た。

「私もだめね…」

二人の携帯に表示される圏外の文字。

しかしその時、かつみには別の物が眼に入っていた。  
それは…

「あの、不動先輩これは…」

かつみが取り出したのは、紫保の荷物の中に入っていた安物のマツチだった。

よくファミレスなどで無料で配られているタイプだ。

「それ？不良のクズが持っていたヤツを押収したのよ」

「これ、使えますよ！！」

先ほどの魔女は体中に羊皮紙を纏っていた。  
羊皮紙は通常の新品の紙よりも燃えやすい。  
このマツチで魔女の身体に火を付ければ…

「でも、そんな物で火をつけるって言うてもかなり近づかないといけないし、第一自分だって巻き添えを喰らってしまうわ」

確かにそうだ。

マツチの長さは精々三cm程度。

こんなもので魔女に火を付けようとしたらかなり近くまで行かないといけない。

あんな化物に掴まったら一巻の終わりだ。

「へへへー！それだってちゃんと考えていますよ！」

そう言うと、かつみは自身のカバンからあるものを取り出した。それは、塗装用の赤色のカラースプレーだった。

「しろの奴が部活で使っつて言っつてたから家にあつたのを持っつてきたんです」

「ラッカースプレー…あなたまさか!？」

「コイツを導火線の代わりに使います！」

かつみのラッカースプレーには非常に強い可燃性の薬品『トルエン』が含まれている。

これを地面に散布し、そこに魔女を誘い込もうというのだ。導火線と化したラッカースプレーの上を魔女が通った瞬間に着火するという寸法だ。

「アタシが囷になりますから、不動先輩はコイツで導火線を書いて

「ください！」

「わかったわ！」

かつみからラッカースプレーを受け取ると、誘導する先にラッカースプレーで地面に塗料を吹き付ける紫保。  
一方、かつみは魔女の前に出て誘導を始めた。

「こつちこつちー！！」

それを見た魔女は怒り狂いかつみを追いかけてまわす。  
だが、その速度ではかつみに追いつけない。  
魔女を適当にあしらいながらうまく誘導していく。  
しかし…

「じのっーじのっー！」

ラッカースプレーが使いかけの物だったため、中の塗料が途中で切れてしまったのだ。

紫保はなんとかして塗料を吹き付けようとするがうまくいかない。

ほんの少しだけなら出るのだが、その程度では導火線の代わりにはならない。

やがて、かつみと魔法の足音がしてくる。

このままでは魔法を倒せない！

「(どつする...?)」

と、その時紫保はあることを思いついた。

それと同時に、先ほど座っていたイスを壁に叩きつけてバラバラに破壊する。

木製の古びたイスだったため簡単に壊すことが出来た。

そして、その破片の中で一番長い棒の先端にありったけの塗料をかける。

殆どなかったが、先端の十センチほどを赤くすることは出来た。

そしてその部分に本棚の本を破った紙を張り付けていく。

塗料には若干の粘性がある。

この塗料で紙を張り付け、いったい何をしようというのか？

「せ、せんばーい！魔法が来ましたー！！」

その声と共に、ゴーレムのような姿をした魔法がかつみの後ろからついてくるのが見えた。

それを確認すると、紫保は手に持った紙を張り付けた棒に火をつけた！！

導火線が作れなくなつた今、彼女が作つたのは…松明。

「不動先輩！それは！？」

「はあああ…たあ！！」

「松明！？…行っけえ！！燃えるおおおお！！！！」

かつみが自身の横を通過したと同時にその松明を魔女に投げつけた！  
体の紙と本に引火し、全身が炎に包まれる魔女。  
やがてその炎は周りの本や本棚にまで燃え移り始める。

「や、やばいよこれ！」

その光景を見て思わずかつみが叫ぶ。  
火に包まれた魔女は完全に沈黙したが、結界は既に火に包まれている。

だが、魔女を倒したことで結界が端の方から徐々に消えていく。  
そしてそこから外の景色が見えた。

自分たちの逃げ場が無くなる前に、二人はなんとかそこに飛び込んだ。

「や、やったわ…」

「魔女を…倒した!!」

夜の公園で思わず抱き合う二人。

自力で魔女を倒したこと、そして見事生還できたことが嬉しかったのだ。

と、そこにキュウベえに導かれて魔女を退治しに来た梓芦がやって来た。

「あれ、かつみさんと紫保さん…?」

「や、やったぜアタシ達…」

「魔女を…倒したわ!」

「え、ええ!!本当ですか!??」

「ああ…!!」

「け、怪我とかはありませんか?」

「アタシは無いけど…」

そう言っつて紫保の方を見るかつみ。

紫保は先ほど松明を投げたときにその燃えカスが右手に当たっつてしまつたのだ。

軽いやけどだが、早く手当をしなければ…

「私に任せてください…」

そう言っつて紫保の手に自身の手をかざす梓芦。

すると、徐々に紫保のやけどが治つていつた。

梓芦は治癒の願いで魔法少女となつた。

そのため、こついつた治療の魔法が得意なのだ。

直接の戦闘は苦手だが、サポートなどに特化している…

そう言つたタイプなのだ。

「すごい…やけどが一瞬で…」

「これが私の魔法です」

「魔法…？」

「まあまあ、それは後でゆっくり話しますから」

「当然よ」

「なあしろ、アタシ達がどうやって魔女を倒したか聞きたくないか、それは…」

梓芦に、長々と先ほどの戦いの経緯を話すかつみ。  
それを見ながらキュウベえは一人思った。

魔法少女以外でも魔女を倒せるものがあるのか…  
と。

第五話 燃えろおおおお!!! (後書き)

攻撃時に叫ぶのが好きなのか、かつみは…

第六話 叶えられる願いを1000個にして(前書き)

今回新キャラ登場です。

## 第六話 叶えられる願いを1000個にして

魔女、そして魔法少女…

あの戦いの翌日、紫保は改めてかつみ達にそれらが何であるかの説明を求めた。

少なくとも、あの化物がこの世の摂理に従った生き物ではないことはわかる。

以前と同じく、昼休みに食堂で話すことにした三人。

四人用のテーブルに紫保に向かう形で座る梓芦とかつみ。

「…で、改めて聞いわ。遊城さんの言っていた魔法って何？」

梓芦に視線を向ける紫保。

昨日の梓芦の使った力…

火傷を一瞬にして直したあの力は確かに魔法としか言いようのない能力だ。

それはそう言った力の総称なのか？

それとも、本当に魔法が存在するともいえるのか？

「魔法っていうのは…」

魔法について説明をしようとする梓芦。  
だが、思わず言葉に詰まってしまう。

しかし何を話せばいいのか？

自分だってまだ魔法の全容を知ったわけでは無い。

あの治療魔法だってキュウベえに教えてもらえるまでは知らなかったのだ。

戸惑う梓芦の前に現れたのは…

『それはぼくが説明した方がいいかな？』

彼女たちの前にキュウベえが現れる。

いつもはかつみと梓芦等と言った魔法少女とその関係のある人物にしか姿を見せないようにしているキュウベえ。

だが、今回は特別だ。

紫保ももしかしたら契約してくれるかもしれないし、ここでもう一度かつみと梓芦に説明しておいた方が何かと便利だと思ったからだ。

…一通りの説明が終わり改めてキュウベえの方を見る紫保。  
触ってみた。

普通の動物のような感じがした。

昨日の戦い、そして今日の前にいるキュウベえ…

しかし、全てを信じると言う方が無理がある。

リアリスト  
現実主義者の紫保ならなおさらだ。

だが、やはり信じるしかない。

それでもなければ昨日のことは説明がつかない。  
紫保は今のキュウベエの説明を全て信じることにした。

『どう？君も魔法少女になるかい？』

そう言われ、しばし考え込む紫保。

願いがかなうというのも梓芦の話を聞くに本当のようだ。

しかし、いま自分に叶えたい願いなどあるのか？

確かにあるにはある。

だが、それはかつみを生徒会に入れたいなどと言った努力すれば叶えられそうな願えばかり。

命を懸けてまで叶える価値のある物ではない。

漫画などに出てくる『不老不死』や『世界征服』と言ったものなどに興味も無い。

魔法少女になるというのは以外と難しいものだ。

…そう思う紫保。

「そこまでして叶えたい願いも無いわね」

今無理に契約して後に未練が残っても困る。

紫保もかつみと同じく魔法少女になることはやめた。

『そっ…』

残念そうな顔をしながらその場を去ろうとするキユウベえ。  
とその時…

「かつみちゃん！」

かつみの座っていた席の後ろから一人の少女が飛び出してきた！

「あ、ゆーじー！」

「ちょっと、最近付き合い悪すぎるよ〜」

「ははは、ごめんごめん」

そう言いながらかつみをポンポンと叩くゆーこと呼ばれた少女。  
彼女の本名は風間遊子<sup>かま いくこ</sup>。

隣のクラスのかつみの友人だ。

最近は魔女などと戦っていたりしたため梓芦の方の付き合いを優先していたのだった。

「みんなで何の話してたの〜？」

「えーと、まあちょっとな…。」

さすがにそのまま魔女退治などというわけにもいかず適当に話を誤魔化すかつみ。

紫保とは違い、遊子はそのままでしつこくはないので簡単に誤魔化すことが出来た。

持ってたジューズを飲みながら遊子が言った。

「さっきから気になってたんだけど、そこにある白いぬいぐるみはなに？」

キュウベえの方を指さしながら言う遊子。

今、キュウベえはかつみ、梓芦、紫保にしか見えないはずだ。

何故、彼女にキュウベえの姿が見えるのか…？

「ゆーこ…お前、こいつが見えるのか？」

「当たり前だよ、目の前にあるのに」

そう言いながらキュウベえをばしぱしと叩く遊子。  
どうやら本当に見えているようだ。

『やめてよ、ぼくだって痛いんだから』

「しゃべった!？」

今までぬいぐるみだと思っていたキュウベえが突然しゃべりだし、  
驚く遊子。

そして二人のやり取りを横目で見ながら考えるかつみ。  
と、ここであることを思い出した。

遊子の家は確か先祖代々『神社』だったことを。  
さらに、靈感も一族の中で最も強いと昔遊子の父から聞いたことがある。

「(そう言う事が…)」

「どうしたんですか?かつみさん?」

「いや、なんでも…」

梓芦が心配して声をかけてくれたが、今は遊子の方が気になる。

遊子は少々天然バカな所が昔からあることをつみは知っている。

もしキュウベえから『魔法少女にならないか』と言われたらとんでもない願いで契約してしまうかもしれない。

後で後悔の無い願いをした方がいいと思っっているかつみはすぐさまキュウベえと話している遊小の方を見た。

『魔法少女になってよ!』

やはり遊子を誘っているキュウベえ。

しかし一方の遊子はどうと…

「じゃあ、あたしが叶えられる願いを1000個にして!」

かなり滅茶苦茶のことを言っている。

『それは無理だよ』

「なんで？」

『そう言うものだからね』

「じゃあ契約しない」

どうやら彼女も契約はしないようだ。  
少なくともかつみの心配していた通りにはならなかったようだ。

「でも、魔女や魔法少女って見てみたいな」

『でしょ！それなら契約を！』

「それはいいよ」

『え』

「かつみちゃんや梓芦ちゃんみたいには戦えないけど、あたしにも何か出来ることないかな？手伝いたいよ！」

キユウベエの話聞いてそちらの方面に興味を持ってしまった遊子。  
そして紫保も…

「それなら、私も協力してあげるわ。一般生徒が死なれでもしたら生徒会としてもいろいろと困るしね」

何やら妙な方向に話がまとまって来た一行。

魔法少女の梓芦。

格闘少女のかつみ。

そして一般人の紫保と遊子。

この四人による対魔女戦線が完成した！

## 第七話 謎の美少女転校生（前書き）

今回から新章突入です。

かなり間が開いてしまったのは

- ・ 『救世のテイマー』 がちょうど最終話近くだったから
  - ・ それでモチベーション全てを使い果たしてしまったから
  - ・ …と言う情けない理由です。
- 章のタイトルでおおよその内容がばれてしまうかもしれませんが、そこは許してください。

## 第七話 謎の美少女転校生

この見滝原を守るため、対魔女チームを結成したかつみ達。放課後の空いた時間をメインに魔女を狩るのが主な活動だ。梓芦の力で魔女を探し、それをかつみ達が叩く。  
(梓芦の魔法は攻撃メインではないため、かつみが攻撃を担当する)  
今日も魔女を見つけ、その結界内で戦っていた…

「とりゃー!!」

かつみの蹴りが透明なビンのような姿をした魔女の横腹(?)に当たると、

どうやらそこが急所だったようだ。

魔女はあっという間にバラバラに砕け散った。

「よし! 今日もいい感じ!」

魔女の亡骸からグリーンフシードを取り出しそれを梓芦に渡すかつみ。  
戦いの成果としては上々だ。  
しかし…

「いいかんじじゃないわよ！」

「そうだよー！」

「なんでだ!?!」

「ちゃんと勝ちましたよ」

「私達が全然活躍してないじゃない!?!」

そう言ったのは紫保と遊子。

実はこの戦いで活躍したのはかつみと梓芦だけであり、この二人は  
後の方で使い魔を少し潰していたくらいだった。

紫保の持ってきた物は木刀。

遊子が持ってきたのは…よくわからないお札のようなモノだ。

「あの…ところでそのお札みたいなのは？」

遊子に紫保が訊ねる。

和紙に筆で書かれた怪しげな文字。

しかも見る限りでは、よく売られている印刷の物では無い。  
筆と墨で書かれた手書きのようだ。

「これ？パパの作ったお札を何枚か家から持ってきたの」

遊子の父はかなり腕の立つ霊媒師らしく、日本中から除霊の依頼が  
後を絶たないらしい。

そのため、滅多に家には帰らず日本中を飛び回っている。

家には父の作ったお札が何枚か保存してあるためそれを持ってきた  
らしい。

ちなみに、そんな事情と将来のこともあって今は遊子が神社の管理  
と仮神主をやっている。

「除霊って…」

「魔女は霊じゃないと思うぞ…」

「でもこれ振り回してる間は使い魔も寄ってこなかったよ」

呆れる紫保とかつみ。

まあ、お札に多少効果があるだけでも良しとしよう。

紫保と遊子…

この二人は魔法少女でもないし、特に格闘センスが良いわけでもない。

『戦いについていけない』のだ。

だからといってせつかく一緒に戦ってくれると言ってくれたのだ。その善意を無駄にしたくは無い。

100

「（魔女との戦いだとやっぱり普通の人間だと少し後れをとる…）」

「アタシと風間さんの力ではやっぱり魔女と戦うのは無理なのかしら…？」

「（でもそうになるとアタシと梓芦だけでこの街を守っていかないといけない…）」

一言に見滝原と言っても広い。

それに、やはり梓芦とかつみの二人ではいつか限界が来てしまう。

もしどちらかが負傷した場合、最悪一人で戦わなければならなくなってしまう。

「（魔法少女の仲間を探して…作戦を練る必要があるかもな…）」

魔法少女の仲間…

誰かを新たにキュウベえと契約刺せるのは難しいだろう。

既に魔法少女となっている者を探せばいいのだが、そう簡単に見つかるわけもない。

だが、戦力の拡大が必要なのも事実。

もっと仲間を増やす必要があるだろう。

「でも、そう簡単に見つかるわけないよなあ…」

翌日、教室で思っかつみ。

以前かつみと体育の試合でケガを負った仁美も退院し、教室にいる。

「以前は悪かったな」

「いいえ、もう済んだことですから」

軽く挨拶すると自分の席に座り、うつ伏せになる。

ここにいる全員が、きっと魔法少女も、魔女も知らないのだろう。  
魔女と戦う魔法少女。

さしずめ人知れず悪と戦う正義のヒーローと言ったところか…

「（まるでアメモミのバットマンだな。…と言っても、アタシは魔法少女じゃないけど…）」

幾らヒーローとはいっても全てが完璧なわけでは無い。

ヒーローにはヒーローの悩みという物がある。

それは本家ヒーロー達と何ら変わらないが…

そういう思っている内に、担任の早乙女先生が教室に入って来た。  
朝のホームルームが始まり、

「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞くように！」

「（大切な話…？なんだよ一体？）」

どうせこういった話など生徒からしたら対して大事な物ではないこ

とが多い。

この先生の場合は特にそれが多い。

自分が男にフラれた話などどうでもいいだろう…

今回もそんな感じの話だと思ったが…

「はい、それでは今日はみなさんに転校生を紹介します」

「（転校生…？この時期に珍しいな）」

普通、転校生なら大きな休みなど後に来るものだとばかり思っていたが…

どんな奴かと気になり、机から顔を上げるかつみ。

教室に入って来たのは…

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

教室に入って来たのは、黒い長髪の、どこか落ち着いた雰囲気のある少女だった。

ある意味ではかつみと正反対のタイプだ。

紹介などを淡々と済ませると、自分の席に着く。

「（暁美ほむら…か）」

どこか普通の生徒とは違う雰囲気を感じる。  
ホームルームを済ませ授業が始まる。

後の授業の体育や数学でも、ほむらは抜群の好成績を見せた。  
それにその容姿。

もう少し人に接する態度さえよければまさに完璧と言っているだけだろ  
う。

「（ま、アタシには関係ないか。しばらくは別のことに専念したい  
しな）」

魔女との戦い、それに空手部の大会も今度に迫っている。  
ちょっと変わった雰囲気、転校生にかまっている暇など無い。  
それに何故だかわからないが、妙にクラスと馴染んでいる気がする  
し…

「（何かアイツと何度もあっているような気がするんだよね…既視  
感でヤツか？）」

そう思いながら、一日の過程を終わらせ、部室へ急ぐかつみ。  
なぜかは分からないが、ほむらが転校してくるシーンを見たとき激  
しい既視感を感じた。  
何度もこのシーンを見た…ような。  
そんな感じが。

「ま、気のせいだな」

そう言っただけで教室を出ようとしたその時…

「ちょっといいかしら…?」

「へッ!?!」

かつみを呼び止めるほむら。

いきなり話しかけられて少し驚くかつみだが、不思議と『初めて話をする』と言うような感じはしなかった。

「あなた…最近何か変わったこととかない?」

「変わったこと?」

変わったことならいくらでもあった。

魔女やキュウベエとの出会い、そして戦い。

いつものチンピラ相手との喧嘩の日々からすれば随分変わったといえる。

だがそんなこと言えるわけがない。

魔法関係のことは出来るだけ内緒にしておいた方がいいからだ。

「い、いや。別に何もないぜ」

「そっ…」

そう言うと、ほむらは去っていった。  
意味深な言葉を残して。

「あまりこのことに深くかかわらない方がいいわ。全てを失いたくないのなら…」

かつみがこの言葉の意味を知るのは、もっと後のことだった…

第七話 謎の美少女転校生（後書き）

剣竜「ぬわあああああん（久しぶりのかつまギ投稿）疲れたあもう!!!」

かつみ「ちかれた…（小声）」

剣竜「風呂入ってさっぱりしましょうよ」

かつみ「は？（威圧）」

第八話 噂の魔法少女！？（前書き）

特に書くことないな

皆さんは何か質問とかないですかね…？（疑問）

## 第八話 噂の魔法少女！？

「ギヤアアアアアアアアア…！！！！」

魔女結界内に響く悲鳴。

魔法少女と魔女の戦いの最中、『奴』は現れた。

魔女を瞬殺し、それと戦っていた魔法少女に鋭い一撃を与える。

眼にもとまらぬ早業。

血をふき出し、その場に倒れる魔法少女。

『奴』はそれを確認すると、その場を去っていった。

それからしてしばらくだった。

魔力の激突を感じ取った梓芦がそこに倒れている魔法少女を見つけたのは…

裏路地に広がる血飛沫と、ボロボロになった一人の少女の身体。急いで少女のそばへと駆け寄る梓芦。年は梓芦と同じくらいか少し上のようだ。幸いにも、倒れていた魔法少女はまだ息があった。梓芦は自身の魔力を使い、倒れていた少女の体を治した。まるで布切れのように引き去れていた皮膚、？き斬られていた喉笛、その全てが何とか元通りになった。

「う、うう……」

「よかった…気づきましたか？」

梓芦が少女に声をかけた。

「…貴女は？」

「私は遊城梓芦あしひら。あなたと同じ、魔法少女よ」

そう言って自身のソウルジェムを見せる梓芦。最初は警戒していた少女だったが、それを見て安心したのか、少しずつ話し始めた。

「…私は瀬道<sup>せどう</sup>亜衣<sup>アイ</sup>。ソウルジェムは…これ」

亜衣がソウルジェムを取り出した。  
藍色に輝くそれはまるで透き通った深い湖の様だった。

「一体なんで倒れてたんですか？魔女と相打ちになった…とか？」

梓芦の問いに、亜衣は先ほどの事を離し始めた。

もともと亜衣はこの街を担当する魔法少女では無く、少し離れた町の魔法少女らしい。

だが、その町はあまり魔女が出なく時折グリーンフシード不足に陥ることがあったという。

そこで、魔女が多く出るといふこの見滝原で魔女を狩っていたらしい。

…この街を担当する魔法少女に見つからないように。

「人の縄張りを勝手に荒らしたのは認めるけど、それでもここまでの傷を負わせられるとは思わなかったわ…」

「どづいつことですか？」

「私を襲ったのは…私達と同じ『魔法少女』だったの…」

亜衣を襲った犯人、それは彼女や梓芦と同じ『魔法少女』だった！？  
魔法少女が魔法少女を襲う…

一体何故…

少し考える梓芦。

真っ先に考えられる理由としては、亜衣の持つグリーンフィードを奪うためだろう。

だが…

「私も最初はそれが目当てで襲ってきたかと思ったのだけれど、奴はグリーンフィードは奪って行かなかった」

「なんで…？」

「さあね。私はしばらく自分の町で魔女を狩ることに専念する。貴女も別の街に穴場を見つけた方がいいわ」

そう言くと、亜衣は去っていった。

平静を装ってはいたものの、亜衣の声はずっと震えていた…

この出来事の翌日、梓芦は放課後にかつみを食堂へと呼び出した。そして、この日の事を話した。

見滝原で魔法少女を襲う『魔法少女』がいるという事を…

「マジ…かよ」

「確かに『魔法少女に襲われた』って言ってました」

「でも、襲われたヤツのグリーンフィードは取られてないんだろ？」

「はい。グリーンフィード狙いの可能性も最初は考えたんですが…」

「じゃあなんで…」

目的の分からない『見えざる敵』。

何故魔法少女を狩るのか、その理由が分からない。

しかも相手の強さや姿などもわからない今、あまり目立つことはしたくない。

「今迄みたいにアタシ達が魔女を狩っていると間違いないか？　アタシ達を狙ってくるだろうな……」

「たぶん……」

「アタシと梓芦はともかく、この事件に不動先輩とゆうーこは巻き込まない方がいいかもな」

魔法少女の梓芦と多くの修羅場を潜り抜けてきたかつみはともかく、紫保と遊子はいくまで一般人。

魔女のような正体のハッキリとした存在が相手ならともかく、相手の正体、目的の全てが分からない今回の事件にあの二人を巻き込むのは避けた方がいいだろう。

「何で魔法少女が同じ魔法少女を……」

改めて考えるかつみ。

と、その時……

「魔法……少女？」

「かつみ……アンタ達、今何の話してたの？」

そこに現れたのは、かつみの同級生のまどかとさやか。

どうやら、今の話を聞いていたようだ。  
何処から聞かれていたかは分からないが、ここは適当に誤魔化す  
かない…！

「え、ええと…こ、今度発売するゲームの話だよ！」

「そ、そうそう！魔法使いが主役のゲームなんです！」

「ふうん。なんだ、私達の勘違いだったみたい」

「話を邪魔してごめんね」

適当に誤魔化すことが出来たが、あまり話に熱中しすぎるとい  
うのも禁物だ。

今日の話はこれくらいにして、二人は解散することにした。

かつみはこの後に空手部の部活動があるらしく、今日は梓芦一人  
の下校だ。

美術部となると、他の運動系の部活よりもかなり早く帰ることが  
多くなるため、あまり友人とは一緒に下校しないようだ。

それ以外にも、梓芦が一人で下校する理由がある。

それは…魔女退治！

「（魔法少女狩りの魔法少女…確かに怖いけれど、だからと言って  
魔女を放っておく訳にもいかないわ！）」

早速近くの公園にそれらしい魔力を感じた梓芦。

案の定、公園には魔女の使い魔が小さな結界を作っていた。だが、肝心の魔女がいない。どうやら、魔女となる前の使い魔のみが結界を張っているようだ。

「使い魔だけ…でも、こいつは倒さないとね」

使い魔と言っても成長すれば立派な魔女となる。そうなれば多くの人間に危害を与えてしまう。それを防ぐためにも、まだ弱いうちに叩いておく。グリーンフシードは手に入らないが、魔女による被害は確実に減らすことが出来る。

「…よし！」

結界に飛び込むと同時に魔法少女姿へと変わり、使い魔へ攻撃を仕掛ける。

小さな蜘蛛のような姿をした使い魔に一発一発確実に攻撃を加える。元々直接の戦闘には向かない梓芦の魔法だが、さすがに使い魔相手に苦戦するほど貧弱では無い。大きな絵筆で使い魔を殴り飛ばし、壁に叩きつける。敵の動きも止まり、あと一発…

「これでトドメよ…」

大きな絵筆を巨大デザインナイフへと変え、それで使い魔を貫く！  
…はずだった。  
だが…

カァン！

辺りに高い金属音が響く。  
梓芦のナイフが何かにはじかれたのだ。  
地面に突き刺さる梓芦のナイフ。  
その隙に使い魔は逃げてしまった。  
公園に張られていた結界は消滅し、辺りはいつもの公園に戻っていた。

「あ、逃げた！？」

使い魔を追掛けようとする梓芦。  
気配をたどっていけばまだ間に合う。  
だが、その前に一人の少女が立ちはだかった…！  
敵意をむき出しにした鋭い眼光を持つ少女。  
梓芦や亜衣と同じ『魔法少女』が…



## 第九話 赤い衝撃（前書き）

どこかで聞いたことあるタイトルですね…  
たまげたなあ…

## 第九話 赤い衝撃

梓芦の前に現れた魔法少女。

その顔は明らかに「お友達になるう」的な顔では無い。  
敵意をむき出しにした者の表情だ。

「（コイツが亜衣さんの言ってた魔法少女狩り…！？）」

梓芦が構える。

亜衣は梓芦よりも強力な魔法少女だ。

その亜衣が敗けたのだ。

もし梓芦が魔法少女狩りと戦えばまず間違いなく負けてしまう。

直接の戦闘で勝ち目はない。

それなら逃げるしかない。

しかし、そうやすやすと逃がしてくれるだろうか…？

「あ、あなたが最近出没してる『魔法少女狩り』なの！？」

梓芦が言った。

まともな回答など期待してはいない。

せめて少しでも隙が出来ればその間に煙幕を張って逃げられる。

そう思ったからだ。

しかし、相手の魔法少女からは意外な答えが返ってきた。

「ハア？何でアタシがそんなことしなけりゃならないんだよ」

否定する相手の魔法少女。

ただシラを切っているだけなのか、それとも…

「現在進行形で私を襲っているでしょ！」

「ナイフをはじめただけで、別にお前を直接狙ったわけじゃないぜ」

確かに、戦闘中にナイフをはじめただけで梓芦を攻撃したわけでは無い。

相手の目的は分からないが、梓芦を狙ったわけではなさそうだ。

「それよりさあ…今アンタが倒そうとしたのって魔女の使い魔じゃねえか」

「それがどうしたのよ…」

「お前、魔法少女のくせに何もわかってないんだな」

そう言いながら、相手の少女が近づいてくる。  
少女の赤い髪が風に靡く。

己の武器である槍を片手に持ち、徐々に歩み寄る。  
この赤髪の少女が魔法少女狩りの犯人なのかは分からない。  
しかし、間違いなく自分に敵対意志を持っていることは確実。

「使い魔は放つて置けばいずれ魔女になる。それから狩ればグリー  
フシードが手に入るんだ」

そう言つて、赤髪の少女が一瞬で梓芦との間合いを取る。  
そして、梓芦の喉元に槍の刃先を突きつけた！  
思わず腰が抜け、その場に倒れる梓芦。

「家畜は太らせてから殺す、使い魔もそれと同じ…」

「そ、そんなこと言つてもその間に人が死んだらどうするのよ！」

「あ!？」

「使い魔だつて人に危害を加えるでしょ！」

「あのさあ…言わなかった？他人がどうなるうが関係ない、グリー  
フシードさえ手に入ればいいんだよ！」

「そんなの絶対に間違つてる！」

「そう。じゃあ死ぬしかないよ…ね！」

少女が槍を構える。

やられる！

梓芦の脳裏にその言葉が浮かんだ。

この距離では回避不能。

確実に殺される！

だが、その時辺りに衝撃が走った。

言葉の比喻では無く、辺りを何らかの『衝撃波』が襲ったのだ。

その勢いで吹き飛ばされる少女と梓芦。

少女の方は耐性を立て直したが、倒れていた梓芦は吹き飛ばされ地面に叩きつけられてしまった。

「（痛てて…でも、アイツから離れられたみたい）」

辺りを襲った衝撃波の正体、どうやらそれも梓芦達と同様の魔法少女の放った者のようだ。

衝撃波により巻き上げられた砂ぼこりの中から一人の少女が姿を現す。

赤髪の少女や梓芦よりも小柄な、小学生程だろうか？

頭にネコ耳を付けた緑髪の少女だ。

「ゆ、ゆま…！」

それを見た赤髪の少女が叫んだ。  
緑髪の少女、ゆまはそれを聞くと梓芦の元へと歩いていった。  
見たところ、こちらに対して敵意はなさそうだ。  
そして、梓芦を庇うように手を大きく広げた。

「これ以上やっちゃダメ！いじめちゃダメだよキョーコ！」

「大丈夫。これ以上はしないさ。元々殺す気も無かったし」

赤髪の少女、杏子が言った。

先ほどまであんな態度で襲ってきたので、にわかには信じがたいが…  
もっとも、よく考えれば杏子は『グリーンフシードが第一』と言って  
いた。

そうなれば、自分以外の魔法少女など邪魔なだけのはず。  
自分や、あのゆまと言う少女も問答無用で始末してしまえばグリーン  
フシードだって簡単に手に入る。

それをしないということは、やはり最初から脅すだけで殺意は無か  
ったという事か…？

梓芦がそう考えているうちに、杏子は槍をしまい変身を解いた。

「この街はアンタ以外にも魔法少女がいるんだ。あんまり勝手な真  
似はしない方がいいぜ。…行こ、ゆま」

「うん！」

そう言つて二人は公園から出て行つた。  
全身に入れていた力がどつと抜ける。  
緊張と疲労が一気に出てしまい、思わずその場に大の字になつて横  
になつてしまふ。  
すっかり日が沈み、暗くなつた空を見上げながら梓芦は先ほど杏子  
の言つていた言葉を思い出していた。

「この街には私以外にも魔法少女がいる…」

今であつた杏子とゆま、そして魔法少女狩りの少女…  
それともまだ見ぬ魔法少女がいるのだろうか？  
それは敵なのか、それとも味方なのか…

「（できれば味方になつてくれる人がいればいいけどなあ…）」

一方、杏子も梓芦から聞いた言葉を思い出していた。  
『魔法少女狩り』の少女のことだ。  
実は杏子は以前からこの事件のことを知っていた。

「（以前キュウベエの奴が言つてたのは本当だったのか…）」

一体何故魔法少女を狩るのか、だれが狩っているのか？  
それはまだ、分からない。

だが、出会えば確実に戦うこととなる。  
杏子としては、ゆまだけは守りたいと思っている。  
魔法少女として一人で生きてきた彼女にできた、たった一人の身内。  
本当は魔法少女にだってしたくは無かったのだが、杏子が知らずの  
内に契約してしまったらしい。

「（魔法少女狩り…もし会ったら絶対叩き潰してやる！）」

「どうしたのキョーコ、そんな怖い顔して…？」

「え、ハハ。なんでも無い。さーてと、今日は晩飯どうするかなー  
？」

ゆまに心配を懸けさせないため、わざとおどけて見せる杏子。  
だが、杏子は心の奥である決意をした。  
絶対にゆまを守って見せる、と。

一方その頃かつみは…

「え、何ここは？」

魔女結界に迷い込んでいた。

## 第九話 赤い衝撃（後書き）

ゆまはコミックスの『おりこ マギカ』の登場人物なので、知らない人もいるかもしれませんが。

『魔法少女 おりこ マギカ』を買って予習、しよう！（宣伝）

第十話 お菓子の魔女と二人の魔法少女（前書き）

剣竜「俺はまどマギ小説を二つ連載している…この意味が分かるかあ…？」

かつみ「ま、まさか!？」

剣竜「そう!二つの小説をさらにクロスオーバーさせることも可能という事だ!」

## 第十話 お菓子の魔女と二人の魔法少女

「え、何ここは？」

下校途中、魔女結界に迷い込んでしまったかつみ。

着替えるのが面倒臭かつたらしく、部活動の時の柔道着のままだ。辺りをきよろきよろ見回す。

先ほどまで病院の近くを歩いていたはず…

「（今はしろの奴も不動先輩もいない…）」

今までの戦いでは仲間達と一緒に戦ってきたから勝つことが出来た。決して自分一人で勝てないと思っっているわけではない。だが、やはり気が鈍ってしまう。

「（一人でやるしかないか…）」

覚悟を決め結界の奥へと歩き出すかつみ。

今回の結界はどこか病院と感じが似ている。

実際の病院近くに発生した結界だからだろうか？

薬や注射器などがそこら辺にあり、非常口を示す緑色に光るアレがあったりした。

「不気味な場所だぜ…」

病院の器具と一緒に辺りに転がっている様々なお菓子。

それを一つ手に取る。

本物のお菓子と同じような、でも何かが違う。

そんな感じがした。

とりあえずそれを放り投げると、さらに結界の奥へと急ぐ。

ただでさえ人通りの多い病院で魔女を野放しにしておくわけにはいかない。

「魔女はどこだ！？出てこい！」

結界の中心部へとつながるドアをけ破り、かつみが叫んだ。

だが、どこにもそれらしい者の姿は無い。

代わりに使い魔は沢山いたが…

目玉？のような姿をした使い魔が近寄ってくるので払いのけ、遠くへ飛ばし、結界を歩いていく。

「魔女はどこだー！？」

と、改めて叫ぶかつみ。

それに呼応したのか、辺りの雰囲気が変わり、魔女が姿を現す。

「（来るか…！）」

戦闘態勢をとり、魔女の出現を待つかつみ。  
だが…

「はあ!?!」

現れた魔女を見て思わず声が出る。

今までの魔女はどれも怪物然とした物だった。

だが、今日の前にいる魔女は違う。

どちらかというとぬいぐるみや何かのマスコットに近い。

いや、こう見えて意外と強いのかも…

そう思いながらしばらく様子を見るが、特に何かする様子は無い。

「（何もしてこない相手を倒すつてもなあ…）」

そう思いながらとりあえず魔女へと使づく。

しかしまだ油断はできない。

あくまでも警戒は解かずだ。

相手は魔女。

何をしてくるか、完全に息の根を止めてみるまで油断はできない。

「よし…！先手必勝だ！」

そう言っただけでかつみが魔女飛びかかるつもり！

だが、その攻撃はを繰り返す前に魔女は遠くへ吹き飛んで行ってしまった。

魔女を誰かが攻撃して吹き飛ばしたのだ。

かつみより先に。

一体誰が…

そう思っているかつみの前に一人の少女が現れた。

魔法少女の梓芦にどこか雰囲気似ている。

…いや、彼女もどうやら魔法少女のようだ。

古めかしいライフル銃？（かつみにはよくわからないが、古い銃とすることは分かった）を持った金髪ロールの少女、『バママミ』はかつみに言った。

「魔女と素手で戦おうとするなんて…無茶するのね。『切札勝美』さん」

「何でアタシの名前を…」

「フフ…結構有名よ。何度も名前は聞いたわ。…同じ学校だしね」

「同じ学校…？」

「一つ上の学年だから、貴女が私のことを知らないのも当然ね…」

そう言うと、先ほどの魔女に持っていた銃で攻撃を加えるマミ。

「ここは危険だから、私に任せて貴女は逃げて！」

「は、はい！」

そう言っただけで、マミはここをマミに任せて結界から抜け出した。

一緒に戦っても良かったのだが、何故か一緒に戦ってはいけないうな気がした。

何故かは分からないが…

結界の通路を出口を求めて進むかつみ。

先ほど通った道に戻って行く。

だが、その途中でかつみは驚きの光景を目にした。

「わ！？お前は…転校生の！？」

「…曉美ほむらよ」

ほむらが結界の壁にリボンのようなものでぐるぐる巻きにされ、拘束されているのを見つけたのだ！

何故ここにほむらがいるのか？

そんなことはどうでもいい。

何とか外せないかとリボンを解こうとするかつみだが、なかなかほむらに近づけない。

「何でお前がここにいるんだ？」

「それはこっちの台詞よ。このことには関わるな…」と言ったはずよ

「そ、それは…人の勝手だろ！」

そう言われつつ、かつみはリボンを引きちぎり、ほむらを拘束から解放した。

先ほどまではリボンで隠れていてわからなかったが、ほむらも魔法少女の姿をしている。

彼女も魔法少女なのだろうか。

「お前も魔法少女なのか…」

「ええ…あなたは違うみたいね」

「まあな。魔法なんて無くても戦えるからな」

そう言っただけで軽く柔道の型や空手の技を見せたりするかつみ。

柔道着を着ているおかげでいつもより強く見える。

技の切れもよく、少なくとも対人戦なら負けはしない自信がある。だがそんなかつみを無視しほむらは話を続ける。

「今回は助けてもらったけど、これ以上関わるとあなたの為にはな

らないわ…」

「関わるなって言われても…」

「ここからもすぐに離れることね。それとも、ここで私に始末された方がいい？」

ほむらがかつみに銃を突きつける。

今まで何度かヤクザや不良たちとの喧嘩の中で本物の銃を見たことがあるが、ほむらの持つ銃はそれと同じ匂いがする。

硝煙の匂いだ。

モデルガンの類ではない、本物の銃。

いつもなら隙を窺って相手の銃を奪ったりけり落としたりできる。

だが、相手は魔法少女。ここで逆らったとして、何をされるかわかった物では無い。

ここはおとなしくしたがつた方がいいだろう。

「ああ、わかったよ…」

口ではそう言うかつみだが、本心では無い。

ほむらも軽く疑うような眼をしていたが、すぐに奥へと向かって走り出した。

「いったい何なんだよ…アイツは」

そういい、結界を出るかつみ。

追い出されてしまった以上この場に長居する必要も無い。

さっさとその場を後にすることにした。

そして、病院から少し離れた所でかつみはあることを考えていた。

先ほど出会った二人の魔法少女のことを。

「(巴さんと転校生の奴…あの二人も魔法少女なのか…)」

梓芦と梓芦が助けた魔法少女、そしてマミとほむら…

そして魔法少女を狩る魔法少女。

現在かつみが知る魔法少女はこの五人が全てだ。

ほむらはどうかはわからないが、マミの方は少なくともこちらに敵意を持っている感じでは無かった。

上手くいけば彼女を味方に引き入れることが出来るかもしれない。

それに、もしかしたら魔法少女狩りについて何か情報も手に入るかもしれない。

そう言う期待もある。

だが、かつみはあることを忘れていた。

「しまった！あの人の名前を聞くのを忘れてた

そう。

この時点でかつみはマミの名前を知らない。

ただ上級生である、という事だけは分かっているが…

「ま、明日辺り不動先輩に聞けばいいか…」

紫保も三年でマミと同じ学年。

外見の特徴さえ言えば知っているかもしれない。

知らなくても、生徒副会長である紫保なら学校内の生徒の写真付きの名簿を持ち出すことくらい簡単はず。

それを見せてもらえば…

「よし！早速明日みんなに言ってやろう！仲間が出来るかもしれないってな！」

そう言って、かつみは帰路についた。

第十話 お菓子の魔女と二人の魔法少女（後書き）

ママさん死んだ？

それとも…？

第十一話 かつみ家の人々（前書き）

今回はちょっとしたことしか書いていません。

## 第十一話 かつみ家の人々

昨日の魔女との遭遇、そして魔法少女二人との出会い…  
その激動の日の翌日…

「んツ…と」

部屋に朝日が差し込む前に目が覚めるかつみ。

大きく背伸びをし、かすかに残る眠気を吹き飛ばす。

ベッドの近くに置いてあった時計を掴み、時間を確認する。

…午前五時。

普通の学生なら二度寝してもおかしくない時間帯だ。

だが、かつみは違う。

一応彼女は、過去に見滝原中学の格闘技（空手、柔道 e t c …）代表に何度か選ばれたほど。

毎日の朝のトレーニングは欠かさない。

「よし、今日も行きますか！」

運動用のジャージに着替え、朝の街を走る。

いつもは多くの人でにぎわう街だが、さすがに朝五時となると誰もいない。

走り終わると軽く体操をし、家に戻る。  
そして、家族を起こして回るのだが…

「ほら！アニキ起きろ！」

かつみが兄の部屋のドアを大きな音を立てて開ける。  
まだ暗い部屋の中に置かれたベッド。  
いつもならそこに兄が寝ているはずなのだが…

「…？」

「かつみ〜！」

物陰から、兄がかつみに抱きつこうとする。  
もちろん軽くそれを避けるかつみ。  
地面に叩きつけられるかつみの兄。

彼の名は切札 勝機<sup>カチキ</sup>。

かつみ家を支える大黒柱だ。

（父と母はかつみが幼い頃に死亡した）

現在25歳と結構いい歳なのだがいまだにシスコンの気が抜けないらしい。

「起こしてくれてありがとなー！やっぱり俺の妹だぜ〜」

地面に顔を打ち付けたまま言う勝機。  
彼は、割と面構えと言われる方だが、これでは台無しだ。

「どうでもいいけど、目え覚めた？」

「ああ！もちろんな！」

「よかった…さうて、弟くんも起こしますか…」

そう言つて二階へと上がつていくかつみ。  
ちなみに勝機の部屋が一階、かつみと弟の部屋が二階にある。  
朝食をとるリビングも一階だ。

「おい弟！起き…」

先ほどと同様にドアを開けようとするかつみ。  
だが、部屋の中からは既に物音がする。  
…もう起きているのだろうか？？

「起きてるよー！」

「それなら早く下に降りてこいよ」

「ごめん、今勉強で忙しいからあとでね」

「はあー勉強好きだねえ、アンタも」

弟の名は切札 かつみち 勝道。

かつみとは正反対の性格の少年だ。

小学生ながら、かなり頭が良く、名門中学への進学も余裕で狙えるほどだとか。

最近テストが近づいているらしく、朝早くから勉強しているようだ。

「別に。ただ姉ちゃんみたいに毎回赤点ギリギリには成りたくないだけだよ」

「…ん？何か言いましたか？弟くん？」

かつみの表情と声色が変わる。

平静を装っているが、明らかにいつもと違う。

「前回のテストの点数、風間さんから聞いたよ。と言っか風間さん



イホイ教えなくても…

「姉ちゃんみたいな脳筋にはなりたく…」

「ふざけんな！」

その言葉にブチ切れた！

勝道に思いつ切り背負い投げを喰らわせた！

だが、勝道もこういったことは慣れているようで、うまく受け身を  
取り部屋の外へと出る。

「ほら、すぐに手が出るんだから。下で兄ちゃんが待ってるよ」

「あ、ああ…（次同じこと言ったら巴投げ喰らわせてやる）」

少し落ち着いたらしく、自室で制服に着替えるかつみ。

階段を下りて下のリビングへと向かう。

リビングのテーブルには勝機の作った朝食が並んであった。

勝機は自営業で飲食店をやっているだけあって料理の腕もかなりの  
物だ。

（ちなみにかつみに料理センスは皆無）

自宅と店舗を兼用したカレー屋をやっている。

「食い終わったら皿は流しに置いとけよ」

「はい」

そう言つて、朝食を食べるかつみと勝道と、その時、かつみは今日の新聞のある記事が目に入った。

「お、かつみが新聞を読むなんて珍しいな」

「四コマ漫画かテレビ欄でも見るんじゃない」

勝道に鉄拳を喰らわせ、新聞を読むかつみ。

そこには、昨日魔女が現れた病院の写真が写っていた。

…嫌な予感がした。

慌てて新聞の記事を読むかつみ。

そこにはこう書かれていた。

「病院で集団幻覚…？」

「ああその記事か。そう言えば昨日の夕方のニュースでもやってたな。何か病院で怪獣を見たって人が大勢いたらしいぜ」

「怪獣…ねえ」

海獣と聞いて大きな恐竜や青いオオカミを思い浮かべるかつみ。だが、そんなマンガのようないいものではないだろう。魔法のモタラした影響は思ったより大きいようだ。

「（そう言えば昨日の魔法少女の先輩、どうなったんだ？）」

ふいと、昨日の戦いの結果がどうなったのかが気になった。まさか負けたわけでは無いだろう。だが…気になる。

「…！」

「お、もう学校行くのか？早いな」

いつもより少し早く家を出て、学校へ向かうかつみ。紫保に聞けばママがどのクラスなのか分かるはずだ。魔法に敗けて、もし死んでいたりしたら…

「（そう言うのは…やめてくれよ…！）」

そう思いながら学校へと向かう。  
待ち伏せしていた不良二人を秒殺し、校門へと滑り込む。

「切札さん、今日はいつもより随分早いわね」

「え、ええちよつと…」

風紀の先生に軽く挨拶をし、紫保の居る教室へ向かう。  
この曜日のこの時間なら彼女は生徒会室にいるはず。  
恐らく一人で書類の整理などをしてるはずなので他の人に話を聞かれる心配も無い。

「不動先輩!」

「切札さん…どうしたのそんなに急いで?」

「ち、ちよつと聞きたいことがあって…」

そう言うとかつみは、昨日会った魔法少女、マミの髪形などを紫保に教え、マミがどの教室にいるかなどを訊ねた。

「たぶん…同じクラスの巴さんだと思うわ」

「へ？知ってるんですか」

「ええ…」

そう言って、生徒会室の資料棚から全生徒の顔写真の乗っている名簿を取り出す紫保。  
そこのあるページを指さした。

「ほら、彼女でしょ？」

「あ、そうそう。この人です！」

「でもなんで巴さんを探してるの？」

「それは後で話します！とにかくありがとうございます！」

そう言ってかつみは生徒会室を後にした。

「いったい何なの…？」



## 第十一話 かつみ家の人々（後書き）

まどか マギカのゲームの情報が出ましたけど、まさか本当にあんなことになるなんて…

他の人もあなるのでしょうか？（ネタバレ対策）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5697w/>

---

格闘少女かつみ マギカ

2011年12月29日17時52分発行